SINAPIS

社会活動センター・シナピスは平和を実現する使命に向けて生きる人びとを応援します

月刊シナピスニュースレター

Vol. 122

2026. 7

年間テーマ「今こそ、戦争を未然に防ごう！」

糸数(いとかず)アブチラガマは、沖縄本島南部の南城(なんじょう)市玉城(たまぐすく)字糸数にある自然洞窟（ガマ）です。沖縄戦時、もともとは糸数集落の避難指定壕でしたが、日本軍の陣地壕や倉庫として使用され、戦場が南下するにつれて南風原(はえばる)陸軍病院の分室となりました。

軍医、看護婦、ひめゆり学徒隊が配属され、全長 270m のガマ内は 600 人以上の負傷兵で埋め尽くされました。

1945 年 5 月 25 日の南部撤退命令により病院が撤退したあとは、糸数の住民と生き残り負傷兵、日本兵の雑居状態となりました。（アブチラガマ公式ホームページより）　（撮影：エリック神父）

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784　FAX/06-6920-2203
Email/sinapis@ostk.catholic.jp
ホームページ/https://sinapis.osaka.catholic.jp/

巻頭言

人類史の到達点・ルアンダ

福音の小さい兄弟会　おおた まさる

人類史には目標があります。宇宙の創造には目標があるのです。宇宙は 138 億年前に造られ、地球は 48 億年前に出来ました。人類が地の面をくまなく覆ったのは、1万 3000 年前でした。やがて紀元前 6000 年頃から古代文明がエジプト・メソポタミヤ・インダス・中国・中南米に始まり巨大な遺跡を残しました。そして、人類は征服地を広げていきましたが、人類史の目的には何があるのかは自覚されていませんでした。それを明確にしたのは、イエス・キリストの「私があなた方を愛したように、互いに愛し合いなさい。」という命令でした。そして戦いを好む人類に自己拡大や他者征服ではなく、他者尊重と共存共栄を目指すように命令されたのでした。その命令が頂点として抱いていたのは「汝の敵を愛し，呪う者のために祈りなさい。」との命令でした。この命令を通して、神は「兄弟姉妹の愛し合う国際共同体」を地上に実現しようとされています。

しかし、人類は悟らずに、戦いを繰り返し、ついに第一次・第二次世界大戦を引き起こすに至りました。さすがに反省し、国際連盟・国際連合を作り、戦争再発を防ぐために力を注ぎましたが、国際組織の力がおよばないアフリカ・ルワンダで 1994 年に 80 万人の大量犠牲者を生んだジェノサイド、ツチ対フツの民族絶滅戦闘をルワンダは引き起こしてしまいました。（ルワンダは、人口は 1220 万人。宗教：カトリック 57%　プロテスタント 37%　イスラム5%）

そして、神はこのルワンダの悲劇を生かして「汝の敵を愛し，呪う者のために祈りなさい。」との命令を<u>実行しないと生きていけない国</u>を作ろうとしておられます。現実に家族を隣人に殺され、その隣人と協力しないと生きていけない現実を引き受ける力が、このアフリカの国にはあるようです。加害者・被害者の和解プログラムを現地で実践している佐々木和之（ささきかずゆき）さんの働きを見ますと、「汝の敵を愛し，呪う者のために祈りなさい。」との命令を実行するのがいかに難しいか、そしていかに希望に満ちているか、さらにいかに周りの国々が支援しなければならないのかが分かります。ぜひ、インターネットで「佐々木和之さん」と検索して、「和解プログラム」のこと、広島市立大学国際学部4年の向地由（むこうじゆい）さんのレポート「一年間の留学をおえて」をご覧ください。

「不法滞在者」という言葉が見えなくするもの

フリーライター　大元（おおもと）　麻美（あさみ）

今年５月22日、法務省・出入国在留管理庁（以下、入管庁）は「不法滞在者ゼロプラン強化推進パッケージ」を発表した。昨年５月に策定した「国民の安全・安心のための不法滞在者ゼロプラン」をさらに強化し、「不法滞在者」の減少を促進するための八つの取り組みを進めるという。その中には、難民認定申請の審査を迅速化し、不認定となって退去強制命令を受けた人々の送還を迅速にする施策も含まれている。私の周囲にはイラン出身の難民認定申請者がいる。彼らの多くは、帰国すれば拘束や拷問、場合によっては死刑の危険さえある人々だ。それにもかかわらず、「新ゼロプラン」のもとでは、「不法滞在者」として減少させるべき対象として扱われる。

この「国民の安全・安心のための」政策をめぐる議論には、一つの重大な問題がある。それは、「不法滞在者」という言葉が現実を正確に表していないことである。「不法滞在者」と聞くと、多くの人は犯罪者を思い浮かべるだろう。しかし、国際社会ではこの言葉はほとんど使われない。国連機関や人権団体では、Undocumented people（必要な法的書類を持たない人々）や「非正規滞在者」という表現が一般的である。なぜなら、「不法」という言葉は、人そのものを違法な存在であるかのように印象づけるからだ。問題なのは人間そのものではなく、その人が置かれた法的状況である。

ところが日本では、入管庁が一貫して「不法滞在者」という言葉を用いている。そして、その中にはなぜか難民認定申請者も含まれている。日本の難民認定制度には、以前から多くの課題が指摘されてきた。日本は先進諸国と比べても難民認定率は極めて低く、その背景には、難民認定を専門に行う独立した第三者機関が存在しないという構造的な問題がある。

難民認定の判断を行うのは入管庁であり、送還業務を担う組織と同じ組織の中で審査が行われている。難民申請者Aさんは、送還部門の職員から「必ず強制送還してやる」と言われた経験を持つ。その後、その職員は難民審査を担当する部署へ異動した。Aさんはその職員から「私は今、難民部門にいる。君が難民認定されることはないだろうね」と告げられたという。「難民認定」と「送還」という本来緊張関係にある業務が同じ組織によって担われている現実がある。

さらに問題なのは、第１回の難民申請で不認定となった人々が、それまで保持していた在留資格を失う場合があることである。その結果、母国に帰れば迫害や命の危険があるにもかかわらず、「不法滞在者」と呼ばれる立場へ追いやられる人が生まれる。つまり、「不法滞在者」という言葉の中には、保護を求めて逃れてきた難民申請者も含まれているのである。

だからこそ私は、「不法滞在者ゼロ」というスローガンに強い違和感を覚える。数字を減らすことが目的になった時、その背後にいる一人ひとりの人生や事情が見えなくなるからだ。言葉は社会の認識をつくる。「不法滞在者」という表現を繰り返し用いれば、人々は彼らを危険な存在、排除すべき存在として見るようになるだろう。しかし、その中には命を守るために逃れてきた人々がいる。

私たちが本当に問うべきなのは、「不法滞在者をどう減らすか」ではない。なぜその人が非正規滞在の状態に置かれているのか、そしてなぜ保護されるべき人が適切に保護されていないのかである。

人を「不法」という言葉でひとまとめにする社会は、やがて人間そのものを排除する社会へと傾いていく。 だからこそ今、「不法滞在者」という言葉の背後にいる一人ひとりの顔と人生に目を向ける必要があるのではないだろうか。

のと　ボランティア報告

元気をもらいに、能登の皆さんに会ってきました！

　今回の能登行きは、シナピスから2チームが別行動で参加しました。
　いつもの難民さんたちと若い世代のチームと、もう1組は社会の第一線を退いた 60 代半ばの男性チームです。
　「還暦を超えたあとの時間は、人のために使いたい」との思いで集まった3人が、輪島で暮らす人びとに出会いに行きました。

左から：麻田さん、池永さん、村木さん、ビスカルド

麻田（あさだ）　伸司（しんじ）

訪問先の皆さまにお会いするまでは、歓迎してもらえるか不安でしたが、どちらでも暖かく迎えてもらい、大変嬉しく思いました。
地震から 2 年半が経過し、生活面での不自由さは解消されつつあるように思われました。
しかし、過疎化は地震で加速しており、1 人もしくは 2 人の高齢世帯が多く、都会のような便利なサービスは期待できない環境は、私には想像がつかないご苦労もあるでしょう。自身が恵まれている事に感謝し、また機会があれば少しでもお役に立ちたいと思っております。

合田（ごうだ）さんのお宅で、
山芋入り特製お好み焼きを
作る麻田伸司さん

村木（むらき）　正靖（まさやす）

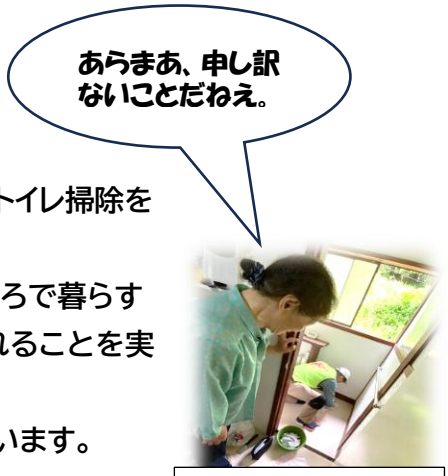
5日の早朝、うぐいすの美しい歌声の中、輪島のカリタスのとサポートセンターに到着。
スタッフの吉田（よしだ）さんの車で、被災されている方の自宅や仮設住宅への訪問に同行させていただきました。
行きかう大型トラックの多さ、工事中の道ばかりで、あれから2年半も経つのにまだまだ復興は道半ばとの印象でした。
特に、未だコンテナを改造した仮設住宅に住んでおられる方がいるのには愕然としました。
さぞかし暑かろうし、寒かろうと気の毒です。
事故後、適切な医療処置がなされなかったために寝たきりで失語症になっておられたお父さんと、介護で腰を痛められているお母さん。
5回もアキレス腱を切られて、痛む足に鎮痛剤を出され、それを飲むと具合が悪くなると言っておられたお母さん。十分な医療、理療が届いていないのだと。
本当は、週に一度でもマッサージをして差し上げたいのに叶わず、もどかしい思いだけが残りました。
みなさん、笑顔で出迎えてくださり、力強く生活しておられるのだと感じた半面、手から伝わる体の疲労の蓄積から察するに、体は悲鳴をあげておられる方が多く、限られた時間の中で何もして差し上げられない自分の無力さと、笑顔で送り出してくださるその姿に、とてもボランティアに来ましたなんて、おこがましくて言えない気持ちでした。

たった一日で、合計 6 名の方
がたへマッサージを施す
村木正靖さん

是非また行かせていただきたいと強く思っております。
帰路、百万石祭りで盛り上がる金沢の街と、輪島のポツリポツリと建っているブルーシートのかかっている家々との落差に戸惑いを感じました。
いろいろと考えさせられた一日でした。

池永（いけなが） 重彦（しげひこ）

この度、６月５日にたった 一日ですが、
輪島市でのボランティアに参加してきました。
見守り訪問は初めての経験で、友人はマッサージやお好み焼き、私はトイレ掃除をさせていただきました。
「カリタスのとサポートセンター」の皆さまは、仮設住宅や山奥深いところで暮らす方々の所へ足繋く通われ、親身になってお話され、寄り添っておられることを実感しました。
どんな時も、このような心の交流が本当に大切なことではないかと思います。



お手洗いをピカピカに掃除をする
池永　重彦さん

作業ボランティア班

作業ボランティア班は今回、地震よりも水害の被害が大きかった輪島市町野町（珠洲市との境に位置）で、コメ作りに取り組む若い農家さんを訪ね、田んぼの畔の草刈りをしました。
前日の大阪からの道中で、シナピスが関わる中国人難民が「強制送還される」との一報が入り、そこからネリさんは何も食べることができなくなり、「翌日の作業は無理だろう」と心配しました。
良く晴れて気温が上がり、風のない中での草刈りはしんどい作業でした。「手を抜いて。そんなに真剣にやったらもたないから」と何度も社員の方に声をかけられましたが、どうしても頑張ってしまう自分との闘いでした。
結果、ネリさんたち3名は作業を“完走”し、美味しいおにぎりを２ 個お昼にいただきながら、午後の作業をはじめて1時間もたたないうちに、私はダウンしました。
体調管理だけでなく、なりわい支援（地元に残り経済活動を続ける方へのボランティア）についても考えさせられる活動となりました。（大森（おおもり） 雄二（ゆうじ））

《ネリさん》のとの大自然の中で安心して守られて、何も悪いことが起らない感じがします。
それは、本当に素晴らしいこと。天国にいるみたい。

《泉原（いずみはら）さん》のとの方のお役にも立てながら、わたし自身も力をいただける。お互いにとって良い関係を築けるのが復興支援の良いところだなと感じました。

「戦後」ですか？

那覇教区信徒　山田（やまだ）　圭吾（けいご）

2026 年 5 月 21 日、日本では戦後 81 年と言われている現在、沖縄戦時にアメリカ軍が投下した 250 キロ爆弾が発見され処理された。

現場の浦添市前田は、映画「ハクソーリッジ」でも紹介された激戦地だったという。今では近くにはモノレール駅もある住宅地で、再開発の工事現場から発見され、半径およそ300メートルの住民や事業所等から900人近くが避難を余儀なくされる事態となった。

県全体では毎年11トン程度以上の不発弾が発見され処理されているが、それでもあと100年はかかるだろうかと言われるほどの不発弾があるらしい。

そしてその処理の際には住宅ばかりでなく、病院や学校、老人ホームや保育園、宗教施設や数々の事業所が避難することになる。その避難の際には一人で動けない人の介助等に携わる人、避難先での食事の確保等も必要であるが、それらの費用については自前で準備しないといけないことになる。ところが、当日大雨とかで処理ができない場合、何日か延期して再度処理予定が組まれるが、延期した場合でも避難先での弁当等はキャンセルできず、次の機会にもまた準備しないといけないことから費用負担も荷重になってしまうのだ。

そのような状況を知ってもらおうと、今回の処理のニュースを各地に送ったところ、県外から「まだ戦後処理ができてないのですね」と返してきた方がおられた。沖縄を慮っての気持ちの表れかと思ったのではあるが、しかし、「戦後と言う言葉に騙されてはいけないですね」と返信したのだった。

アメリカ兵に「戦後は･･･」とか言うと、年齢にもよるが「いつの戦争の事か？」となることがあるとの話がある。長い間ずーっと戦争してるから、個人によって戦後が違うと言うのだ。

そして今沖縄は、互いに銃を構えて戦うような「戦闘」は無くても、81 年前の沖縄戦以来ずっと「戦争状態」ではないだろうか。自分の国で自国民が他国の兵隊に殺されるのは戦争状態ではないのか。

他国の戦闘機が落ちてきたり、車や人が降ってきたり、爆音に晒されて寝られなかったり、授業が出来なかったりする。軍用車に轢き殺されたり、事件や事故にあわされたり、暴行されたり、殺されたりしても被疑者は罪に問われず、あるいは母国に逃げ帰ってしまったら泣き寝入りさせられたり、不発弾で怪我したり、亡くなったり。高速道路を走っている車に銃弾が当たったり、民間地に銃弾が飛んできたり、国道上空を砲弾が横切って飛んでいたり（これは今はやっていないが）、毎日毎日恐怖の中で生活してる沖縄は「戦後」ではなくて「戦争中」なのだと思うのだ。

アメリカ軍にとっては彼らの基地があるのなら、それを自由に使うのは当然のことになるだろう。しかし、沖縄は沖縄からそのための土地を提供したのではなく、「銃剣とブルドーザー」と表記されるような形で、強制的に接収されたのだ。しかしまた、その状況を許してるのは日本国なのではないか。

1945 年以降、アメリカ軍統治下にあった沖縄が、そのあまりの酷さにその状況からの脱却のため「平和憲法」のもとに行けば「平和」が得られるかと「日本復帰」を求めて闘争し、72 年に「日本国」の一県となったはずなのに、今では基本的人権さえも保障されないような状況だと嘆き、苦しみ、そしてその悔しさ悲しさを訴え、同じ日本国民としての平等を求めて続けているのはなぜなのか。

沖縄に、戦後はまだ来ていないのではないか。そして他国の軍隊が大手を振って駐留している日本の状況で果たして「独立」、「平和」が実現されているのだろうか。

同じ日本国民であるなら、沖縄の人も平和に生きることができるようにしてください。

神戸地区学習会「ふっこうのかけ橋」報告
原発事故から15年、原発被災地の今　～南相馬市小高区での取り組み～

「ふっこうのかけ橋」事務局　野村　季里

5月30日、神戸中央教会に廣畑 裕子さんをお招きしました。廣畑さんは、2016年7月に避難解除された南相馬市小高区で唐辛子を加工販売する小高工房の代表です。なぜ唐辛子か。避難解除まで畑が動物たちに荒らされる中、唯一唐辛子だけは食べられなかったのを見て、「これだ！」と思いつかれたそうです。

私が小高工房を知ったのは2023年の夏で、実際に訪問がかなったのは昨年11月のスタディーツアーでした。

廣畑 裕子さん

工房のドアを開けると、元気いっぱいで迎えてくださったのが廣畑さんでした。ご挨拶する間もなく「はい、どうぞ試食して」と手のひらに唐辛子を乗せられ「からい！」と叫ぶと「はい、チョコレート食べて」という調子で、初対面とは思えないフレンドリーさに一挙に距離が縮まった気がしました。

私たちは2022年から毎年スタディーツアーを行い、双葉町、大熊町、浪江町などを訪れ、原発被災伝承館や双葉駅、なみえ道の駅など、復興を象徴する立派でおしゃれな建物や震災遺構を見てきました。

同じ原発被災地ですが、小高区のことはあまり報道されることもなく知らない方が多いのではと思います。小高区には、復興を象徴するようなものはほとんどありません。でも私の印象では、土地を愛し、地に足をつけて故郷を再生したいという人や、小高を盛り上げたいと願う移住者や長期滞在者が多い地域ではないかと思っています。今回、廣畑さんをお招きしたのは、小高夏期自由大学での講演の記録『苦難の日々を心に刻み、再生へ向かって歩む』（ヨベル出版）を読んだことがきっかけです。

学習会当日の午前中、少し神戸をご案内しました。その時に廣畑さんが神戸に寄せている気持ち一神戸の方にはとても助けられた、特に被災者の経験談には復興へのヒントがたくさんあった、だから神戸に来てお礼を言いたかったー を聴かせてくれました。「頼まれごとは試されごと」「依頼には、はいかYESで答える」をモットーに、廣畑さんは遠く神戸まで来てくださいました。

講演では、被災から現在まで、その時々の思いを小高の風景とともにまとめられた動画を拝見しました。工房の立ち上げから根気強く商品開発に取り組まれた苦労話、ネーミングへの思いなど、ユーモアを交えて話してくださいました。一番新しいサルサソースは『ことづて』という商品名です。廣畑さん曰く、「最近、ことづてってしなくなってませんか？」そういえば、いつのまにか伝達の手段としての人から人への「ことづて」はLINEやメールにとって代わられた気がします。コミュニティーを再生するということは居場所を作ること、風景を作ること、共通の話題を作ること、今を伝える、普通の暮らしを大切にすること、そして普通を取り戻すこと。今、廣畑さんが丁寧に取り組まれていることです。

終了後も、参加された方々は廣畑さんに話しかけ、それぞれの思いを伝えていました。今回は活動や経験をお聴きするだけでなく、廣畑さんのお人柄に触れることで、真の復興とは何かを少し知ることができた気がします。そしてまた小高工房を訪れたくなりました。

＊小高工房の商品はネットから注文できます。ぜひ、ホームページを検索してみてください

平和学習講演会「壊れつつある世界の中で ―日本は、そして私たちは今―」 報告

講師：松浦悟郎司教（名古屋教区）　（主催： ピース9の会 ＆「甲東平和を考える会」）

ピース9かけはし 土器屋 香代子

戦後 80 年かけて作り上げてきた平和が、目に見えて崩れていく光景を目の当たりにして、漠然とした不安を抱えながら過ごす毎日でした。しかし今回、「あきらめずに平和をめざす行動をしよう！」との思いを持つ人が集まり、「平和を守るための生き方」を共有できた感があります。今後の我々の行動次第で、道が変わる！と。

会場となった「アプリ甲東」（西宮市）集会室は、同じ思いを持つ 77 名の“同志”でいっぱいになりました。

講師：松浦悟郎司教・・・1991 年に湾岸戦争が起こった時、日本政府は自衛隊機で戦争避難民を輸送し事実上自衛隊の戦争加担に足を踏み入れようとしましたが、松浦神父（当時）らが始めた「民間機チャーター」募金運動が全国に広がり、この支援金で民間機2機を調達するという大きな実りがあり、民衆の手で日本が戦争に加担するのを未然に防ぐことを実証しました。戦争のできる国になりつつある日本の歩みをみんなの力で阻止したいと奔走中。

《世界情勢》 2002年以降、世界の独裁的国家の数（91）が、民主的国家の数（88）を上回った結果、グローバル化の恩恵が市民に行き渡らず、富の偏在を生んだ。権威主義は、市民を監視して異論を封じ、国家統制の下での意思疎通も迅速で一見効率が良い。「隣国が軍事力を高めているから、我々も軍事力を・・・」と言われると否定できず、「現状追認」に流されることはないか？ その傾向が漠然とした世論へとつながる危険もある。

《憲法 9 条とその改憲案について・・・攻められたらどうする？》・・・どちらが攻められる可能性が低いのか？

A：米国が関わる戦争に同盟国として加わっていく体制。膨大な防衛費を捻出。

B：米国の軍事行動と一線を画し、他国に届くミサイルを持たず、殺傷兵器も他国に売らないので近隣諸国は日本に警戒心を抱かない。「軍事費」を国内外の教育や生活のために使い、国民のいのちと財産を守る。

《9 条に自衛隊を盛り込んだらどうなる？》

「必要な自衛の措置」が明記されることで、従来の「必要最低限」という歯止めが効かなくなる。「自衛隊違憲論」を封じ込め、普通の軍隊に変え、国民の様々な権利を制約する。隊員には憲法上の人権規定が当てはまらず、律するのは軍法会議。戦死者も出る。これまで、自衛隊が「戦力」ではないことを証明するための努力（災害復旧支援など）で国民の支援を得ていたが、その努力は不要になる。

《現行憲法97条（基本的人権の本質）》→<u>自民党案では削除</u>

《現行憲法21条》集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。・・・<u>改憲案21条2項では、国が「公益や公の秩序を害することを目的とした」と判断した場合に一切の表現が奪われます。</u>

《現行憲法99条》 天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負ふ。・・・改憲草案102条：全て<u>国民は、この憲法を尊重しなければならない。</u>

《現行憲法前文》・・・主権は「国民」　自民党の「日本国憲法」改正草案・・・「日本国は、長い歴史と固有の文化を持ち、国民統合の象徴である天皇を戴く国家。日本国民は、国と郷土を誇りと気概を持って自ら守り・・・

憲法改正によって、憲法が「国家を縛る鎖」ではなく「国民を縛る鎖」になることをはっきりと確認できました。

アニメ『戦争のつくりかた』を鑑賞・・・「ウンウンある、ある！」と思っていることばかり。

勇気を出して「たいへんだよ！」と声を出す必要を感じました。

『死んだ男の残したものは』（作詞：谷川俊太郎　歌：倍賞千恵子）が会場に流れると、自然に口ずさむ声が・・・。♪死んだ兵士の残したものは、壊れた銃とゆがんだ地球　他には何も残せなかった　平和ひとつ残せなかった　死んだ彼らの残したものは　生きてる私　生きてるあなた・・・死んだ歴史の残したものは　・・・♪

【参加者の感想より】息子 2 人が自衛官です。憲法 9 条は親としても心のよりどころの一つです。この憲法があるからこそ、「困っている人たちの力になりたい」という息子らの言葉に安心していました。政府の外交が生きることばとして伝えていくことが出来ますように。

非戦こそ平和への道

― ２人の元兵士が語る「憲法９条」 ―

フリーライター　大元（おおもと） 麻美（あさみ）

人間はもともと、人を殺すようには創られていない。神様は人間を、よいことのためにお創りになった。

そんなことを痛感させられるのが、ベトナム戦争（1955～75 年）で数えきれないほどの人を殺したアレン・ネルソンさん（1947～2009 年）の生きざまだ。その体験は著書『「ネルソンさん、あなたは人をころしましたか？」―ベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争」』や『戦場で心が壊れて―元海兵隊員の証言』で知ることができる。映画『アレン・ネルソン　９条を抱きしめて―元米海兵隊員が語る戦争の真実』でも、その歩みを知ることができる。

貧困家庭に生まれ、人種差別の中で育ったネルソンさんにとって、海兵隊にスカウトされたことは名誉であり、貧困とは無縁の輝かしい未来を保障してくれるはずのものだった。米国のヒーローになれると信じ、つらい訓練にも耐えた。戦う相手は「人間ではない」と洗脳され、人殺しの訓練を受け、ベトナムの戦場に送られた。そして、ベトナム兵だけではなく、子どもや女性、高齢者までも殺害する中で、ネルソンさんは衝撃的な体験をする。たまたま逃げ込んだ洞窟で、ベトナム人女性の出産に立ち会ってしまったのだ。自分の両手で赤ちゃんを抱きとめた瞬間、「ベトナム人も自分と同じ人間なのだ」と悟ったのだった。

しかし、それほどシンプルな真実にたどり着くために払った代償は、あまりにも大きすぎた。退役後に PTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症したネルソンさんは、自分の「罪」を受け入れるところから、回復への道を歩み始める。

そんな彼に希望を与えたのは、1996 年の来日時に出合った「憲法９条」だった。「戦争を放棄する」「戦力はもたない」―。「憲法９条」こそが戦争をなくす唯一の道だと痛感し、日本で 13 年にわたって 1200 回を超える講演を行い、日本人自身に「憲法９条」の力をもっと理解してほしいと訴え続けた。暴力や戦争、侵略で平和はつくれない。「憲法９条」はどんな核兵器よりも力がある。「憲法９条」に守ってもらった日本人は、今度は「憲法９条」を守るべきだ。彼のその言葉に、今こそ向き合う時が来ている。

一方、埼玉県在住の木製家具作家で社会活動家のダニー・ネフセタイさん（1957 年生まれ）も、「憲法９条」の大切さを訴える元兵士の一人だ。著書に『国のために死ぬのはすばらしい？――イスラエルからきたユダヤ人家具作家の平和論』や『どうして戦争しちゃいけないの？――元イスラエル兵ダニーさんのお話』などがある。ネフセタイさんはイスラエル空軍の元兵士で、長年受けた教育によって、「国や家族を守るために“敵”を殺すのは仕方がない」「平和を保つのは軍事力」だと思ってきた。ところが、除隊後に観光で訪れた日本で日本人女性と結婚し、これまで自分が信じていた“常識”を覆すような多くの「気づき」を得て、じわじわと価値観が変わっていく。

ネフセタイさんは３歳の頃から、シリア人は“敵”だと教育されてきた。そんなシリア人と日本で初めて出会い、普通に会話した時、「シリア人は人間だった。敵じゃなかった」と気づく。それは衝撃的な体験だった。「敵という概念は DNA（遺伝子）に組み込まれていないんだ」と気づいたのだ。

さらに、「『差別』がないと戦争はできない。『相手は人間じゃないよ』と洗脳されて、初めて人間は人間を殺せる」ということを痛感する。そうした「気づき」の積み重ねによって、「国を守るのは軍隊ではない。世界一強い軍隊を持っていても国は守れない。武器を持てば持つほど戦争は終わらなくなる」と考えるようになった。

戦争を放棄してこそ、平和を維持することができる―。ネフセタイさんはそう語り、「憲法９条」を守ろうと訴えている。

６月に公開された映画『ダニーさんの気づき　平和のためにできること』は、現在 DVD（上映権付き、5000 円）として販売されている。

障がい者委員会より

我が教会で「手話べり会」を設けた時の様子

堺教会　木本（きもと）　昌美（まさみ）

会の名前は『クローバー』・・・十字架に似ている事から決定する。希望・信仰・愛情・幸福という意味があると知る。

手話は、教会と関わりが深いことはご存知ですか。

その始まりは、「中世ヨーロッパの修道院より伝わる」とされている。スペイン→フランス→アメリカ→日本。日本には、明治時代に伝わる。

浅い歴史と思われるが、18世紀中頃のフランスでシャルル・ミシャエル・ド・レペ神父が、ろう者に自然な身振りを体系化したことが世界的起源とされている。

このように凄い歴史があったにもかかわらず、コミュニケーション共感力の乏しさで教会から離れた時期があった。やすみやすみをしながら、せめて復活祭とクリスマスミサだけは与り、手話で会話できる神父も少なくなり、どうすることもできなかった。

ある時、お誘いがあった。それは、大阪高松教区障がい者委員会が主催した、「病者・障がい者とともに歩むミサ」と交流会でした。高松市の桜町教会で行われた行事が記憶に新しい。

今の世の中で思うことだが、生きづらさの増大から来る情報保障のなさ、比較、常に足りない自分を感じてしまう中で、逃げたくなる社会だ。

LGBTQ＋などで活動をアライ（支援者）として私もなんとか頑張っているので、幸いにもひとりで悩むことなく人の集う所へ出かけている。

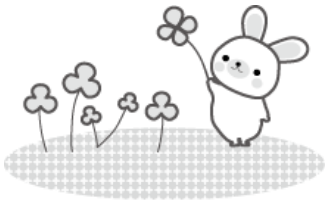
そのために、私は手話が第一言語なので、「手話通訳者養成」までは無理でも、身近な人と関わることの大切さを広める。そこから『クローバー』という会を作る。確かに、手話講座でもない、テキストだと身につけられない。

最近、スマホで人の声を読み取るアプリができているから、情報を得る物質的な利便性は極限まで高まったが、心の余裕、安定を求める声が多いと思う。

孤独か？ 自由か？ ソーシャルメディア時代の人間関係が、複雑になるおそれがある。それでも集うことの大切さ、やはり、手話は「命」と同じと云われている。

いつかは、手話も公用語であると認めてほしい、という思いは変わらない。そんな中で、信者の前川（まえかわ）さんと何度も話し、信徒会長の由留木（ゆるき）さんとも沢山話し合い、月に一回のペースでミサ後30分でも、少しずつ集うことを目標にして、例えば「説教の話題」、「美味しいお店の紹介」、「旅の想い出」、「ろうあるある」、「悩んでいる事」などを　ジェスチャー、口話（通訳がいる時は手話）で交流する。

作ってから5回目。 まだ、これからだ！



事務局こぼれ話

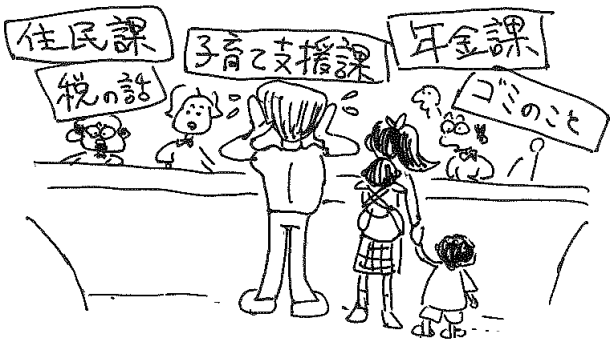
ビスカルド　篤子（あつこ）

伴走支援ボランティア

先日、日本語を使えない家族の住民登録に付き添いました。住民課→年金課→子育て支援課→再び住民課、とフロアを回り、全てが終わるまで2時間以上かかりました。翻訳機能を使いながら代筆できる個所は私が記入し、待ち時間には、いま何の手続きをしているのかを当事者が理解するまでゆっくり説明しました。

海外ルーツの人との関わりで特に喜ばれるのがこうした「同行支援」です。シナピスでは役所のほか病院や学校、金融機関などへの付き添いボランティアを募集しています。平日の9時から5時まで好きな時間帯を登録していただき、うまくマッチングできれば出動をお願いしています。

「私は言葉ができないから」と尻込みされる方もありますが、必要とされるのは言葉よりも「心強さ」です。実は「日本人がそばにいるだけで相手の態度が変わる」との声がとても多いのです。日本人がいるかいないかで態度を変える人にこそ問題があるのですが、それはともかく「そばにいる支援」は必要です。かかる実費はシナピスからカンパします。あなたの隙間時間を人助けに！



生活保護、なんて良い制度だろう

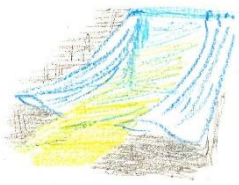
いま私は区役所の人たちと一緒に、ある親子を定期的に訪問しています。

区によれば、この家庭は夫婦ともども人間不信が強く、訪問ヘルパーのいる時間帯でなければドアを開けてくれないそうです。困った担当者は妻がフィリピンルーツであることに着目し「教会の人に違う角度から関わってもらうのはどうか」と考えました。

こうしてシナピスに声がかかり、私が生活保護担当者と初めて訪問した日のことです。ヘルパーさんの掃除の邪魔にならぬように気遣いながら、私たちは足の踏み場もないほど散らかる部屋に入りました。忙しく立ち回るヘルパーさんたちの真ん中に無表情に突っ立つ夫と誰が来てもお構いなしにベッドに寝そべる妻。小さな女の子は棚の上に飛び乗ったりして狭い家の中を飛び回っていました。「教会の人？ ふうん、あたしのお母さん、教会行っとったで。あたしはユリ(仮名)。あたしらみんな知的と身体と精神と発達障害やねん」と、ユリさんは自己紹介をしました。生保担当者は、帳面を手に生活状況を細かく確認していきました。「〇ちゃんは保育所へ行ってる？」「(連れて)行けへんな」「ユリさんは外出してる？」「出えへん」…問答は続きました。

区の生活保護課が中心となり、子育て支援課、訪問看護、ヘルパーなど福祉関係の人が何人も関わってこの家族は生きています。こうした関係者たちが来るときだけ家の扉と窓が開き、風が通り、人が家族と言葉を交わします。ユリさんたちは公助がなければ到底生きてゆけません。私は制度のありがたさを感じずにはいられませんでした。

生活保護受給者に対して「怠け者」「自分たちより工工目してる」と言ってはいかんのです。良い社会保障制度の予算が削られないように、市民は目覚めて当事者と働く人を守らないといけない、と私はユリさん一家を見て認識を新たにしました。



私は平和の道具

I am an Instrument of Peace

思い出し Remembering
ともに歩み Walking Together
守る and Protecting

いよいよ平和旬間・月間が始まります。
７月～８月１週目に開催される企画を「シナピスの風」（教会掲示用）に掲載しています。それぞれの企画の詳しい内容などは、「教区報７月号」や全小教区にお届けしている「平和旬間・月間 2026 案内集」をご覧ください。
「今こそ、戦争を未然に防ぐ」ために、ともに考え、行動しましょう。

平和旬間・月間事務局
（シナピス）☎06-6942-1784

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。

＊**お米、お米券**のご寄付をお願いします
＊**伴走支援ボランティア**募集
詳しくは本紙「事務局だより」をご覧ください

シナピスホームカフェ　おやすみの　お知らせ

いつもシナピスカフェに訪問してくださり、
ありがとうございます。
諸事情により、カフェの開催をしばらく
おやすみすることになりました。
カフェを可愛がっていただいているみなさまには
ご不便をおかけいたします。
再開時期は未定ですが、またお知らせいたします。

「ニュースレター配布停止」、「点訳版の郵送」をご希望の方はシナピスにご連絡ください。☎06-6942-1784

あとがき

サッカーW 杯が始まり、日本代表が好調だ。サッカー大好き人間の私にとって、W 杯は大きな楽しみだった、これまでは。ところが、今は素直に応援できない。いつのことかは忘れたが、ある代表戦後のインタビューで、監督の言葉を聞いてから、私はだめになった。「日本国民の皆さん、応援ありがとうございました・・・」

なんとも言えない違和感を覚えたことを忘れられない。なぜ、そんなに限定するの？　日本国籍を持つ日本人だけに向けて語りかけているようで辛かった。日本代表を応援する人の中には、日本で生まれて育ちながら日本国籍を持てない人や、移住してきた人など様々いるはずだ。

「サポーター」という、誰も排除しない言葉があるのに、なぜ「日本国民」なの？試合後の熱さゆえの言葉と思いたいが、「君が代に涙する指揮官」や「日の丸を振って勝利に熱狂する若者たち」の姿をメディアがこぞって伝えるさまは、気持ちが悪い。国をあげて一つになる練習をさせられているみたいで。

たかが一言にそんなに反応しなくても、と家では呆れられているけれど、気持ちよくサッカーを楽しめる世の中であってほしいだけなのです。（雄）

▽▲▽　シナピスの主な活動　▽▲▽

◆広報活動
・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携
◆学習会研修会の企画
◆こども基金
世界・日本のこどもたちへの援助
◆日本カトリック司教協議会との連携
◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ
◆難民移住移動者支援
難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者　相談ダイヤル
☎　06-6941-4999

アクセス

〒540-0004　大阪市中央区玉造 2-24-22
カトリック大阪高松大司教区事務局内

●公共交通機関ご利用の場合
JR 森ノ宮駅より　約 1000m
地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より　約 800m
JR 玉造駅より　約 1000m
地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m
●車でお越しの場合
阪神高速１３号東大阪線法円坂出口
法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

□**郵便振替　00960-7-61419**
加入者名　カトリック大阪高松大司教区
代表役員　前田万葉

□**三井住友銀行　玉造支店　普通　9401958**
カトリック大阪高松大司教区　シナピス
代表役員　前田万葉

□**オンラインはこちら　➡➡➡**